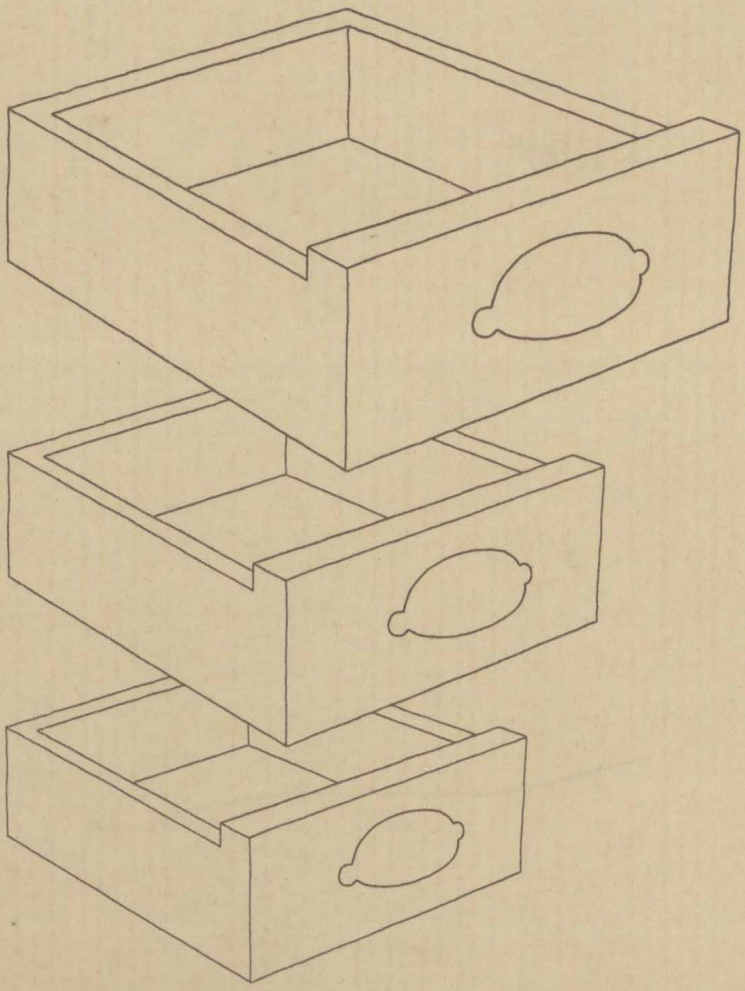
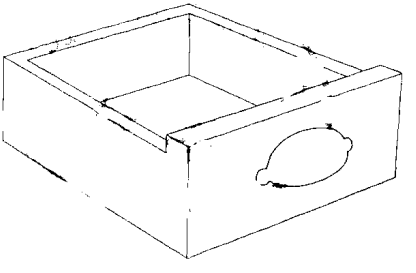


整理前の玩具箱

尾辻克彦



大和書房

整理前の玩具箱
一九八二年五月三〇日初版発行

著　者　尾辻克彦　©1982
発行者　大和岩雄
発行所　大和書房
東京都文京区関口一―三三
郵便番号　一一二
電話（三〇三）四五一一
振替　東京六―六四二二七

本文印刷　信毎書籍印刷
製　本　ナショナル製本
装画　赤瀬川原平
装幀　高麗隆彦
0095-680201-4406
Printed in Japan

目

次

整理前の玩具箱
まず頭の中のガラクタのこと　9
やめる　15
死ぬ　22
もたれ合う　30
山の上罐詰　38
ご訪問　47
ピストルとマヨネーズ　56
原爆の心配　65
ハン死ハン生　72

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

なんとなく黴菌　80
もぐる　89
飛ぶ　97
あいしい　105
アンチジャイアンツ　114
名器　122
手づくり犯罪　130
おんなの時代　138
偶然×偶然　146
MARUMIE　153

まだ整理前の玩具箱 163
思想にからまれた半年間のこと 167
思想の配置について 173
思想的中産階級 179
風俗の逆風 186
思想の秋葉原 193
明るい思想 200
カタログ星人 206
スーパーマンを待ちながら 214
*
十年前の横井庄一のこと 225
生モノを並べたことのあとがき

整理前の玩具箱

整理前の玩具箱

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

まず頭の中のガラクタのこと

ゴト……、という音はわりと好きだ。ゴトン、ゴトン、という音もいい。カタカタ、もいい。それからコロコロ、もいい。私の頭の中ではいつもそういう音がしている。頭の中にいろんなガラクタが渾然としていて、私が仕事をしたり買物に行ったりして動くたびに、頭の中のガラクタ類も、ゴト……、カタカタ……、コロコロ……、と動き回る。まあ自分でも乱雑だなあと思う。

その頭の中のガラクタというのは、いろいろと世間で見たり、聞いたり、読んだりしたことだ。それと考えたこともある。見たときには丸いものだったのが、頭の中で考えるうちに伸びてきて棒のようになったりもする。最初は真っ赤だったものが、頭の中で考えるうちに変色して黄色くなってきたりする。何かに使えそうなものもあり、何の部品かわからずに転がっているものもある。そういういろんなガラクタが頭の中

に散らばっているのだ。学問的には情報という。自分の回りで見聞きしたことが情報となって頭の中に散らばり、ゴトゴトと動き回っているのだ。そんな頭の中のガラクタが、世の中に何か出来事が起るたびにどんどん増えている。

世の中にはいつもいろんな出来事が起きている。自動車が衝突したり、棚から本が落ちたり、庭に草が生えてボウボウになったり、泥棒が銀行でお金を盗んだり、太陽と月が重なって日蝕になったり、いつもつぎからつぎへと新しい出来事が起きている。こういう出来事というのは世界中でいくつぐらいあるのだろうか。

子供のころはヒマだからそんなことばかり考えていた。縁側にしゃがんで庭に降る雨を見つめたりしながら、この雨も水の落ちて来る線の一本一本が出来事なのだから、この目の前だけでも物凄い数の出来事がある。その数を千、万、億、兆……、と考えながら、頭がボーッとなった。やっぱり子供というのは哲学者だ。

大人になるともうなかなかボーッと哲学をしてもいられない。世の中には相変らずいろんな出来事がもう本当に気持が悪くなるぐらいにウジャウジャと起きているのだけど、そんな数のことを「凄い」と思ってボーッとはしていられないのだ。大人は朝ご飯や晩ご飯を食べるのに忙しい。それからそのご飯の準備に忙しい。だけどその準備中にも出来事はどんどん起きていて、大人たちはご飯の準備をする片手間にそれを

見ては「うわっ」とか「うおっ」とか驚いている。
ちょうど長島監督が引退するころだった。山口百恵も引退を決めて、その自伝の『蒼い時』というのが爆発的に売れているころだった。私の頭の中でその二つがまた新たにガラクタみたいになってコロコロと転がっているところへ、
「リン……」
と電話が鳴って、ある雑誌社から仕事の注文が来た。文章を書く仕事だった。それも連載で。
「月刊です。ええ。ですから毎月一回。それで一回まあ四百字で十枚ていど……」
私は怠け者である。だからいつも新しい仕事の電話があると、ああ断りたいなあ、と思ってしまう。でも仕事というのは断るわけにはいかない。タクシーが乗車拒否できないのと同じようなもので、いやそれとは違うかもしれないけれど、お金の必要な人間にとっては仕事を断る理由というのがなかなか見つからなくて困ってしまう。
「で内容はですねえ、いちおう先生におまかせするというか……」
先生だ。相手は生徒でもないのに。いや別に何でもない。でもはじめて先生といわれたときにはゾクゾクとして震え上がった。もうずいぶん昔の、青年のころだ。そのときにはどうしてもその言葉が耳に障って、

「いや……、その〝先生〟というのはやめて下さい」
などといってしまった。あえてそんなことをいってしまって、いま思い出すと恥ずかしい。それはたとえば、相手の人がポケットから出した名刺を札束と間違えて、慌てて両手を振りながら、
「いや、そんなものは受取れません」
とか何とか早まって口走ってしまったようなものなのである。先生といわれたからといって、それは別に偉く思われているのではない。とりあえずそう呼んでおけば間違いはないという、これはただ外交上の言葉なのだ。それを慌てて札束と間違えたりして、いや札束ではなかったけれど、とにかく、ああ恥ずかしい。
「ただ私どもの希望としては、いちおう何か新聞記事とかテレビのニュースとか、何かその月の事件をめぐって書いていただけるといいと思うのでございますが」
「そうすると社会時評みたいな……」
「いえ、時評というほど固いものではなくて、何か現実の事件を素材にして、そこで先生のお感じになったことをご自由に書いていただければ……」
これもタクシーと同じで、相手のいう行先を変えるわけにはいかない。そうか。事件か。現実の事件ね。新聞にはいつも何かしら事件が載っている。長島監督の引退。

百恵ちゃんの引退。最近は引退が流行るね。そうだ。そんなことを書けばいいのだ。なるほど。それで私は、

「はい」

と答えてしまった。タクシーなんて返事もせずに走り出すのに、私はちゃんと返事をして、それから走りはじめた。頭の中でガラゴロとガラクタ類が混ざり合っている。走って行くと締切りがどんどん近づいて来る。私は乱雑な頭のままで、中のガラクタ類を揺すぶりながら、毎月の締切りを走り抜けたのだ。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com